

徳川賞

公益財団法人徳川記念財団は、公益活動の一環として、日本近世研究に貢献著しい優れた学術研究著作を表彰し、賞状並びに副賞として一〇〇万円を贈呈する「徳川賞」を制定しております。本年はその第一九回として、財団内に設けられました選考委員会において慎重審議の結果、次の作品を受賞作とすることに決定いたしました。

選考委員長 高埜 利彦
 選考委員 大石 学
 榎原 悟
 佐藤 孝之
 田代 和生



仲町 啓子氏

【略 歴】

- 1951年 大分県出身
- 1980年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学
- 1980年 群馬県立女子大学文学部美学美術史学科助手
- 1985年 実践女子大学文学部美学美術史学科専任講師
- 1994年 実践女子大学文学部教授
- 1996年 ニューヨーク・メトロポリタン美術館客員研究員
- 2006年 実践女子大学香雪記念資料館館長
- 2012年 国立歴史民俗博物館運営会議委員
- 2016年 秋田県立近代美術館長
- 2020年 秋田県立近代美術特任館長

第一九回「徳川賞」選考報告

選考委員 榎原 悟

〔選考経過〕

令和三（二〇二一）年七月一日、第一九回「徳川賞」の第一回選考委員会を開催した。昨年に引き続き、本年も新型コロナウイルス感染症防止のため、霞が関コモンゲート西館三七階霞山会館会議室を会場にした。令和二年中に刊行された日本近世史に係わる学術書（単著）の中

から、あらかじめ五人の選考委員がそれぞれ徳川賞第一次候補案を提出。それをもとに事務局によって合計二二人の著者・書名の第一次選考リストが作成された。

選考会議では、例年の方式を踏襲し、これら二二本の著作から一〇本前後を第二次候補として選出する方針を確認した後、二二本についての評価が話し合われた。審議の結果、一一本を徳川賞第二次候補として選出した。

選ばれた候補作一点につき、複数の選考委員が査読を担当。九月十七日、第二回選考委員会が徳川記念財団事務所を会場に開催された。一一本の候補作につき、査読した委員から一点ごとの査読結果が報告された（田代委員はリモート出席）。各委員の意見を中心に審議を進めた結果、六件の評価が高く、これらを最終審査の対象とした。

絞られた六点につき、さらに審議を尽くした結果、仲町啓子『光琳論』（中央公論美術出版）は、多年にわたる研究の成果が結実した労作であり、従来の研究水準を大きく引き上げるものと認められ、徳川賞に相応しい内容を持つと評価された。その旨、列席の徳川記念財団理事長徳川家広氏に報告、承認のもと、ここに仲町啓子氏の『光琳論』を第一九回徳川賞受賞作とすることに決定した。

〔「光琳論」の内容・評価〕

日本絵画史上、最高の絵師の一人と目される尾形光琳（一六五八―一七二六）について、長年、調査と研究をつくしてきた著者が、満を持し、書き下した光琳論。全六章に巻末資料を附した大作である。

その構成は、次の通り。

- 第一章 研究史と本書の構成
- 第二章 江戸時代前半の京都と尾形家の人々
- 第三章 絵師として立つ―公家社会への接近と光琳初期の制作―
- 第四章 新たな出発と『燕子花図屏風』
- 第五章 光琳の江戸行き成果と意味
- 第六章 晩年期の造形と『紅白梅図屏風』

各章の標題を掲げたが、これによって本書は、光琳が絵師として立つことを決意した三〇歳代から五九歳で亡くなるま



光琳論

『光琳論』
 仲町 啓子 著（中央公論美術出版）



での事蹟を年代に即して述べると共に、各年代を代表する作品について分析した書であることが分かるだろう。ただし、そこで著者が目ざしたことは、歴史の中でひとりの人間として生きた絵師光琳の姿を描き出すことと、その作品を単に画風の変遷を追うという視点からだけでなく、それが生み出された時代と環境の中でいかなる意味を有したかという問いかけを常に重視した点にある。

そのためであるのだろう、光琳以前の京都と尾形家の人々を述べるために一章を当てたのだ。むしろ、光琳その人が、既に京都と尾形家の歴史を背負った存在であることを示すためだろうし、さらにそうした光琳をめぐる四つの系譜類を巻末資料として収めたのも、それら資料を含む『小西家旧蔵資料』（光琳の粉本・画稿・文書類を多数含む）そのものが、尾形家、小西家（光琳の息子辰次郎が養子に迎えられた家）の歴代の手によって大切に保管された結果であることを慮った故であろう。それを巻末に附した本書の構成は見事と云うほかない。

しかし、そうして光琳とその作品を改めて歴史のなかに置き直してみると、従来とはまた別の側面が見えてくる。ここでは、本書が指摘した事例を一点、光琳の事蹟を例に見ておきたい。

それは光琳の京における屋敷選択に係わる。元禄六年（一六九三）頃、光琳は、父宗謙から譲り受けた山里町の屋敷から中町藪内町の屋敷へ引っ越しする。その動機となったのは、この後光琳がパトロンと恃む二条綱平（一六七二―一七〇〇）の屋敷から近距離に住まうことになった。その近さならば、夜のお伽や急なお召しにも対応できる。つまり中町藪内町の屋敷への転居には、二条家を通じて公家社会へ接近してゆくことと、それを契機に絵師として生きていくこと

を本気で考え始めていた、三〇代半ば過ぎた光琳の意思と思惑が窺えるのだと云う。

さらに江戸より京に戻った光琳は、正徳元年（一七一―）新町通二条下ルに画室のある別宅を新築した。いわゆる「光琳屋敷」と呼ばれる屋敷が、それである。場所は二条城近く。あたりには有力大名の京都屋敷が存在した。江戸に下った時に扶持を貰った酒井雅楽頭家や、光琳畢生の名作《紅白梅図屏風》（MOA美術館蔵）が伝来した津軽家とも至近距離である。そう云えば、光琳の屏風には大名家旧蔵品が多く、それらの大半は江戸から帰った後の制作であると云う。まさしくその時期に画室を備えた屋敷を、それも二条城付近に設けたのである。新居の位置は、大名からの注文に素早く対応するための利便性を考慮した結果であるとみただけである。中町藪内町への転居と同じ理由である。時期を隔て、一見無関係にも思える二つの転居。しかし、ここに本書は、共通の動機を見出した。しかもそこからさらに注文主やパトロンとの関係、その意向を斟酌しつつ制作することを余儀なくする、近世の絵師光琳の積極的で、したたかな姿を導き出した。時代に生きた光琳像の提示である。

いや、本書の新知見は、それだけではない。当然そうした見方は、作品そのものの評価にも影響を与える。光琳が敬愛してやまなかった宗達一代の傑作《風神雷神図屏風》（建仁寺蔵）を正確に写した光琳の作がある（東京国立博物館蔵一橋徳川家伝来）。形はしっかりと写しながらも、光琳は色彩や線の質を大幅に変え、あまつさえ画面をひと回り大きくした。従来の見方ではこうした変更と努力が空転し、この作品に対して失敗作とは云わないまでも、低い評価が下されてきた。しかし、本書では、むしろそこにこ

そ光琳の工夫を認めるべきだとし、数々の変更は、この光琳屏風が用いられる空間を斟酌した結果であると見、大名からの注文を想定した。画面を大きくしたのも、それならば得心がいく。

重要なのは、こうした検証が、著者の提唱する、もつとも地道な絵師研究の方法すなわち、その絵師が生きた時代に沿いながら彼の足跡を確かめて行く手法によって達成されている点である。文中で「画家」の語を意図的に避け、「絵師」の語を用いたのも、そうした研究方法からなのだろう。

本書は、従来の光琳観とその作品論を一新させた光琳研究の金字塔と云うにとどまらず、広く近世の絵師研究にも範を示した優れた著作として高く評価したい。

第一九回「徳川賞」授与式開催

昨年一月三日（文化の日）学士会館において第一九回「徳川賞」授与式を開催致しました。今回は前回見合わせた「徳川賞」受賞者の講話、徳川奨励賞受賞者・指導教授の紹介を合せて実施する充実した内容となりました。

午後二時、徳川家広理事長の挨拶で幕を開け、榊原悟選考委員による選考経過報告、第一九回「徳川賞」受賞者・仲町啓子氏への賞状・副賞授与と続きました。その後、仲町氏および第一八回受賞者（岩橋勝、村田路人氏）の講話、第一七回、第一八回徳川奨励賞受賞者の紹介、研究内容の報告と進み、午後五時過ぎまで続きました。



前列左より 徳川家広理事長、村田路人氏、仲町啓子氏、岩橋勝氏、徳川恒孝名誉理事長
後列左より 榊原悟選考委員、田代和生選考委員、大石学選考委員、佐藤孝之選考委員、高埜利彦選考委員長

（当日の関係者へのインタビューの様子が財団 YouTube チャンネルでご覧いただけます。財団 HP よりどうぞ。）